# 二〇二六年度　高校国語（一回）

**一、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）**

*詭弁の常套手段としてしばしば用いられるのは、本来なら繊細に論じられるべき複雑な議論を、単純な言葉に置き換えて表現し、それによって印象を操作したり、論点をすり替えたりすることである。特に、専門的で難しい議論を、極端に平易な言葉で表現することは、そうした効果を発揮する。

このように、複雑な問題を単純な言葉で表現する技法は、言語化とも呼ばれる。私たちが他者とコミュニケーションをする上で、言語化の能力が重要であることは言うまでもない。しかし、それが悪用されれば、言語化は詭弁の道具にもなる。特に、トランプの演説にトクチョウ(a)的な、留保のない断言は、彼の詭弁に力を与えているようにも思える。

ビジネスの領域においても、こうした言語化能力には大きな注目が集まっている。コピーライターの荒木俊哉によれば、「多くの『ビジネスパーソン』が言語化に悩んでいる」のであり、それは「［　①　］」と呼ばれる不安をもたらしているという。つまり、誰もが言語化能力を身に付けたいと思いながら、同時にそれが得られないことに苦しんでいる、ということだ。**（中略）**

言語化とは何か。荒木はそれを説明するために、「［　②　］言うか」ということと、「［　③　］言うか」ということを区別する。前者が言語化の領分であり、後者はコミュニケーションの領分である。たとえば、ある企画についてプレゼンテーションするとき、その企画をどのような言葉で説明するのか、ということが言語化能力であり、そのプレゼンテーションでどう振る舞うのか、ということがコミュニケーション能力である。

言語化能力とコミュニケーション能力は必ずしも同一ではない。言語化がタクみ(b)であったとしても、話し方が上手くないために、相手に伝わらないことはありえる。また、どんなに話し方が上手くても、その内容が十分に言語化されていなければ、その話が相手に刺さることはないだろう。その意味において、言葉で相手に何かを伝えるためには、この二つの能力が両方とも必要である。

荒木によれば、④現代社会はかつてないほど言語化能力が必要となった時代である。しかし、それはなぜなのだろうか。彼はその理由を明確に説明していないが、筆者の考えによれば、そこには大きく分けて二つの理由がある。【ア】

第一に、社会の変化がかつてないほど激しくなったからである。新しいテクノロジーの登場によって、既存の*語彙では説明ができない事態や存在が数多く出現するようになった。「暗号資産」、「メタバース」、「ブロックチェーン」など、⑤枚挙に暇がない。そうしたテクノロジーは短い期間で社会に浸透し、市場の状況を刻一刻と変化させていく。しかし、それが既存の語彙によって説明ができない以上、私たちには自分が置かれている状況を理解することができなくなってしまう。それを可能にするためには、既存の語彙を組み替えたり、新たな語彙を創出したりするなどして、人々が理解できるように物事を説明できなければならない。だからこそ、言語化能力が必要になる。【イ】

第二に、そもそも物事を理解するための共通言語が私たちから失われているからである。これは、*ポスト・トゥルースの状況と密接に関係する。現代社会において客観的な真実は、あくまでも「私」がそれをどのような立場から眺めるかによって、制約される。それは言い換えるなら、立場を超えて世界を説明するための普遍的な語彙が成立しなくなった、ということだ。【ウ】

注意するべきことは、この第二の理由は、社会で新しい変化が起きているか否かと、基本的に関係がない、ということだ。既存の語彙で説明できない事態が生じるから、言語化が必要なのではない。すでにそれに対して言語化がなされている事柄についても、私たちは自分自身の視点から、それを言語化することを求められる。なぜなら、その事柄が何であるのか、ということは、それをどのような立場から眺めるかによって制約されるのであり、したがって言語化に正解はないからである。何をどのように言語化することもできるからこそ、言語化能力はかえって要求されるのだ。【エ】

クリエイティブディレクターの三浦崇宏は、言語化が社会に及ぼす影響はかつてなく大きなものになっている、と指摘する。

> インターネットとスマホの普及により、社会における情報の流通量は飛躍的に増加した。⑥言葉を取り巻く状況は、10年前と比べるとかなり変わってきている。もっと言うと言葉で何かを動かしたり、変えられる可能性がますます広がっている時代だ。「言葉」の力はより強くなっていく。これこそ言葉にするまでもない確信が、ぼくにはある。

三浦が強調するのは、言葉によって事態を動かすことができるようになったのは、特定の領域の専門家ではなく、素人の人々である、ということだ。かつては、「作家」や「詩人」や「*コピーライター」といった「言葉のプロ」が大きな影響力を発揮していた。しかし、ソーシャルメディアによって言葉に求められる役割は「共感」と「速度」へと変わってきた。そうした観点から考えるなら、専門家の言葉よりも、むしろ日常を生きる人々の言葉の方が、より大きな影響力を持ちうるのである。

したがって、現代社会においては、自分独自の視点から物事を言語化することが美徳として要求されている。客観的な真実として物事をどう語るべきか、ではなく、「私」自身がそれをどのように言語化するのかが、問われている。なぜなら、そこに問い合わせることで客観的な真実を確かめることができるような基準は、もう存在しないと思われているからだ。三浦によれば、「自分自身の人生から生まれ出てくる自分の言葉」こそが、「本当の言葉」なのである。

しかし、⑦それは大きな圧力となって機能することもありえる事態だ。自分独自の視点に美徳が見出される、ということは、言い換えるなら他者と同じことを言えなくなる、ということでもある。たとえば、ある物事について、世間で通用している客観的な評価があり、そしてその評価に「私」が深く納得していたとしても、その評価をそのまま語ることはできない。それは自分の言葉ではないからである。もしも世間的な評価を繰り返すだけであれば、「自分の意見がない人間」として低く評価される。

また、三浦が指摘するように、言語化には「速度」が求められる。何かを言語化する必要があるとき、私たちは、それをただちに実

# 二〇二六年度　高校国語（一回）

行しなければならない。つまり言語化は原則的に即答でなければならない。他者は「私」が言語化する時間を待ってくれない。言語化能力が高い人間とは、何年もかけて自分の言葉を育む人ではなく、その場その場で瞬間的に人々の胸を打つことができる人、その意味で即興的であり、機転が利き、瞬発力のある人である、と言える。

しかし、普通に考えれば、独自性と速度は両立しない。ある物事について、世間的な評価とは違った仕方でそれを言語化するためには、長い時間をかけた(c)ジュクリョや探究が必要となる。反対に、すぐに思いつくことができるような言葉に、独自性はない。したがって両者を同時に追求することはそもそも困難だ。その(d)ムジュンに引き裂かれることが、人々に言語化コンプレックスを喚起しているのではないだろうか。

（戸谷洋志『詭弁と論破　対立を生みだす仕組みを哲学する』による）

（注）＊詭弁 ＝ 間違っていることを正しいと思わせるようにごまかした議論。
＊常套手段 ＝ ありふれた方法。
＊語彙 ＝ 知っている言葉の種類や数。ボキャブラリー。
＊ポスト・トゥルースの状況 ＝ 客観的な事実よりも個人の感情や信念が世論形成に強い影響力を持つ状況。
＊コピーライター ＝ 広告や宣伝文を作り、商品・サービスの魅力を伝え、人々の購買意欲を喚起する言葉の専門家。

問一　二重傍線部(a)「トクチョウ」・(b)「タク（み）」・(c)「ジュクリョ」・(d)「ムジュン」を漢字に改めなさい。（楷書で大きくはっきりと書くこと）

問二　空欄［　①　］に入る言葉を最後まで読んだ上で、本文中より十字で抜き出しなさい。

問三　空欄［②］・［③］に入る言葉として最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　いつ　　イ　どこで　　ウ　誰が　　エ　何を　　オ　なぜ　　カ　どう

問四　次の段落が本文中より抜けている。【ア】～【エ】のどこに戻せばよいか。記号で答えなさい。

> たとえば、中世ヨーロッパのように、キリスト教が普遍的な世界観として受け入れられていた時代には、今日のような言語化能力は、そもそも必要なかっただろう。なぜなら、世界は聖書の語彙によって説明できるからである。反対に、今日においてはそうした語彙が失われたからこそ、自分なりの言葉で物事を説明することが求められるのだ。

問五　傍線部④「現代社会はかつてないほど言語化能力が必要となった時代である」とあるが、その理由として正しいものには○、間違っているものには×と答えなさい。

(1)　どんなに話し方が上手でも、その内容が十分に言語化されていなければ、その話が相手に刺さることはないから。
(2)　社会の変化が激しくなったことで、既存の語彙を組み替えたり、新たな語彙を創出したりする必要が生じたから。
(3)　ポスト・トゥルースの状況を背景に、立場を超えて世界を説明するための普遍的な語彙が成立しなくなったから。
(4)　既存の語彙で説明ができない事態や存在が数多く出現したため、物事を理解するための共通言語が失われたから。

問六　傍線部⑤「枚挙に暇がない」の意味として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　数え上げたらきりがない　　イ　次々と生み出されている
ウ　留まるところを知らない　　エ　理解できないものも多い

問七　傍線部⑥「言葉を取り巻く状況は、10年前と比べるとかなり変わってきている」とはどういうことか。本文中の語句を用いて具体的に説明しなさい。

問八　傍線部⑦「それは大きな圧力となって機能することもありえる」のはなぜか。その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　ある物事に世間で通用している客観的な評価とは異なる自分独自の評価でなければ価値がないから。
イ　たとえ他人と同じ意見だったとしても独自の言葉で表現できなければ、低く評価されてしまうから。
ウ　どんなに独自性のある意見でも、原則その場その場で瞬間的に言語化できなければ意味がないから。
エ　何年もかけてはぐくんだ自分の言葉で語られた意見でなければ人々の胸を打つことはできないから。

**二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある。）**

〔春海渉はロービジョンという視覚障碍（しょうがい）を持つ小学一年生である。通学中に頭をぶつけて運ばれた北見眼科医院で視能訓練士の野宮恭一と出会った。この日、野宮は北見医師とともに渉の小学校での生活ぶりを視察に来ていた。〕

渉君は列の後ろの方だが女の子に囲まれて、配膳を手伝ってもらっていた。どんなふうに世話を焼かれているのか分からないけれど、(a)細々と手が入り同じことを何度も伝えられているようだ。その度に彼はいつもの輝くばかりの笑顔でお礼を言っていた。手伝っている女の子も生き生きとしている。彼の世話ができるのが楽しいのだろうか。

# 二〇二六年度　高校国語（一回）

彼のお皿だけが他の子どものお皿とは違い真っ黒だ。
「あのお皿は？」
と質問すると、北見先生も興味を持っていたようで視線が椎葉先生に集まった。
「あれは彼専用の給食のお皿です。コントラストがはっきりしているものを使っています」
「コントラストですか？」
「ええ。給食を載せているお盆とお皿と食べ物との区別がはっきりしやすいものの方がいいということで、特別に持って来てもらいました。これを持ち込むだけでも、ひと悶着(b)ありました」
「というと？」と北見先生が訊いた。
「三月に春海君のお母さんの郁美さんから①提案があった時、前の校長先生は彼の食器を持ってくることは許可するけれど、なぜだか毎日持ち帰るようにって言ったんです。でも私と担任の青山先生が反対していたんです」
僕は状況がうまく飲み込めず、疑問を口にした。
「なぜ反対されたんですか？」
「校長先生は管理の問題と衛生面の問題があるということでした。でもそれを春海君に押し付けちゃうと、すごく大変になっちゃうんですよ」
椎葉先生は思い出しながら、少し怒っているようだった。
「彼は小学校で生活するためにいろんな道具を持ち込むことになります。点字の教科書を使う時もあって、あれってすごく分厚くて重いんです。道具は他にもいろいろあって、学校に置くことができずに毎日全部の物を持ち帰っていたら、とても小学一年生では運ぶことのできない量や重さになります」
それは確かに大変だ。近年、小学生の教科が増えてただでさえランドセルが増量傾向にあると聞いたことがある。涉君の体格を考えると［A］ではないのかも知れない。
「ルールは分かるけれど、ほんの少し融通(c)をきかせてもいいじゃないかって話になったんです。それでも、うまく意見が通らなかったんですが、四月になって矢ヶ瀬先生が新しい校長先生になった途端、お皿は置いていい、春海君の道具も必要と認められれば学校に保管するのを担任の責任で許可、という形になりました。私と担任の青山先生は嬉しくて……。それで彼はいま、あのコントラストの強いお皿で食事をすることができるようになりました」
「なるほど」と彼女の話を聞きながら、②涉君を囲む社会のことが分かったような気がした。
彼が使うお皿一つとっても、それをどう扱うか皆で決めることになるのだ。
彼を囲むすべての人が何が最善か考えるようになる。僕は彼らにコントラストが強い食器が必要だなんて考えたことがなかった。
僕は涉君に視線を向けた。食事を受け取り席に着いて『いただきます』を待っていた。彼の周りの小学生は相変わらず彼に目を向けながら甲斐甲斐しく世話を焼いているようだ。

**（中略）**

どうやら全員が食事が終わった頃合いらしく、青山先生は『ごちそうさまでした』の号令をかけた。すぐに片付けが始まり、涉君もトレーを運んでいた。
そこでは、彼を誰も手伝わなかった。
恐ろしいほどあっさりしている。しばらく見ていると、彼にも片付けはできるからだと気付いた。みんなただ外に飛び出していきたいだけだ。教室が空っぽになるまで、それほど時間はかからなかった。僕らは彼らの行動の速さに驚愕(きょうがく)していた。涉君も障害があるとは思えないほど動きが速い。僕が不思議そうに眺めていると、椎葉先生が説明してくれた。
「慣れた場所ならあんなふうに動けるみたいです。私も最初見た時は、驚きました。みんなにぶつからないように声掛けしようと思ったのですが、それもあまり必要ないみたいでした。ああしていても、実はみんな彼を見ていてぶつかることはないみたいです」
「それはなぜですか？」
椎葉先生が笑った。
③「たぶん、彼が『仲間』だからだと思います」
「それはどういう意味なのですか」
「ご覧になると分かりますよ」と彼女は僕らを校庭に連れ出した。
校庭には子どもたちの声が溢(あふ)れていた。もう空は青い。子どもたちの声の向こう側に小川のせせらぎが聞こえた。澄んだ空気が柔らかい風と一緒に運ばれてくる。わずかに甘い春の香りがする。
子どもたちはドッジボールをしていた。大声で声をかけあって、本気で遊んでいる。中には肩の強い男の子もいて、ボールにはかなりの速度がついていた。
涉君は内野側にいて、スピンのかかったボールがすぐ傍を通っている。また頭をぶつけるのではないかと思い、身を乗り出したけれど、先生たちは静観している。青山先生は、
「あの子たち、［B］はないですよね。でも、大丈夫。彼を見ていてください。意外と当たらないんですよ」
と言っているうちに、外野の子どもが涉君を狙った。
明らかに当たる角度でボールは飛んできたが、涉君はボールの方向を見て綺麗(きれい)に避けた。動きは素早く、重心の移動も見事だった。傍目(はため)には運動神経の良い子が、綺麗にボールを避けたようにしか見えない。外野に飛んだボールがまた戻ってきて、もう一度、彼を狙

# 二〇二六年度　高校国語（一回）

ったけれど、二度目も避けた。偶然ではないようだった。
「どうして、当たらないんでしょう」と訊ねると、
「私にも分かりません。皆にも訊いてみましたが、涉君は他の子よりも当たらないそうです」
と椎葉先生が言った。北見先生を見ても肩をすくめていた。すると、青山先生が、
「たぶん、皆が声掛けをしてどこにボールがあるのか分かるようにゲームをしているのだと思います。ほら」
と言って指を差した。よく見ると、子どもたちはボールが回った子どもの名前を呼んで、騒いでいた。(d)僕らには分からなかったけれど、実はゲームの中でごく自然に涉君が遊びやすいような工夫が行われていたのだろうか。だが、彼らが生真面目にそんなことを行うとは思えない。みんな目の前の遊びに一生懸命だ。
僕も覚えがあるけれど、子どもは仲の良い友達の名前をよく叫ぶ。それが自然にゲームの中に組み込まれたということだろうか。だとしたら、涉君は毎回変わる外野と内野の友達の名前を瞬時に覚えていることになる。そんなことができるのだろうかと考え、青山先生に視線を向けると、僕の疑問に気付いたように説明してくれた。
「記憶力のいい子なのでたぶん誰がどこにいるのか覚えているのだと思いますよ。外野をやりたい子どもと内野をやりたい子どもは偏りがあるので、それを覚えているというのもあると思います。それともう一つは、彼は他の子よりも飛び抜けて運動ができる子のようにも思えます。身体は小さいですが、足のばねや身体の軽さ、速さは本当にすごいです。鬼ごっこをしても追いつけないですよ」
「鬼ごっこをしたことがあるのですか？」
「ありますよ。体育の時間にグラウンドで、突然子どもにタッチされて鬼になりました。そして、涉君を追いかけたけれど、あまりに速くて追いつけませんでした。子どもたちに訊いても『涉が簡単につかまるわけないじゃん』と言われました。彼らにしてみると当然らしいです。涉君はクラスの中では、運動ができて人当たりのいい、ちょっとしたヒーローのような感じですね」
彼女は誇らしげに説明してくれた。
「私はあの子の宝物は、あの身体能力と笑顔だと思います。それにちょっとやそっとじゃへこたれない心」
僕は涉君が椎葉先生に向けて言った言葉を思い出して呟いた。
「ちょっと失敗しちゃった……」
彼女はこちらを向いて自分のことのように嬉しそうに笑った。
「そうです。それ。私もときどき彼の表情とあの言葉を、彼がいない時にも思い出しますよ。『ちょっと失敗しちゃった』って。『ちょっと失敗しただけだから、僕は大丈夫』って聞こえるんです。そして、また全力で目についたものに向かっていく。その姿が子どもたち皆に見えているんだと思います。あの子たち皆いい子でしょう？」
「ええ。なんていうか、イメージしていたよりもずっといい子たちでした」
④彼女は、纏っていた静けさを崩して嬉しそうに、頷いた。
「そうでしょう。私も何年も教師をしていますが、一年生のクラスはなかったです。涉君がクラスの中心にいてくれることで、私も助かっています。彼がいてくれるからこんなに優しくて楽しいクラスはなかったです。涉君がクラスの
「得難い経験？」
「未知のものに出会い、自分たちで工夫すること。手を差し伸べ、感謝されて、同じように自分たちも助けられること。かけがえのない仲間との時間……、挙げていくときりがないほどです。彼らは涉君にとって何が一番良いのかを考えて行動しているようにも思えます。あんなふうに容赦なくドッジボールをして、ときどき涉君にボールをぶつけたりもしますが、彼のためのルール作りもしています。絶対に爪はじきにしたり見捨てたりはしません。彼ら全員にもそれぞれの意見はあって、やりたいこともあるのですが、それを一つにまとめて、涉君のために行動することもできるということです。それも心からそうしたいと思って行動するのです。大人でもなかなか難しいことのように思えます」

**（中略）**

お昼休みが終わるとすぐに授業が始まった。
国語の時間だった。涉君の席は、黒板に向かって左側の一番前の席だ。彼の視野に適した位置に机はあった。彼専用の棚も机の横に配置されている。道具は見るからに多いようだった。
青山先生が授業を行い、椎葉先生と一緒に僕らは少し離れて見学していた。
涉君は単眼鏡を使いながら黒板を見ていた。紙焼けした再生紙のプリントが配られ書き取りが始まると、椎葉先生は彼の後ろに回った。僕らも手招きされたので、彼女と同じ場所に立った。青山先生の説明の声だけが響いていた。涉君も皆と同じように書き取りを始めたけれど、自分の名前を枠の中に綺麗に書くことはできない。聞かされていた通りだった。手先が上手く使えずはみ出す、という程度ではなく、明らかに線を無視して字の大きさを揃えている。見えていない。それは明らかだ。相変わらず彼の表情は真剣だった。名前を書き終わり、彼がこちらを振り向いた。
「僕できてる？」と椎葉先生に訊ねた。先生は、もう一度枠を説明し、一緒に名前の書き取りを始めた。
「また、失敗しちゃった」と小声で彼は言った。「［C］だよ。もう一回」となだめてはいるけれど、名前どころか他の平仮名も同じように枠から飛び出ている。
簡単な漢字や平仮名を覚えさせてほしいというのは、涉君の母親の郁美さんの要望でもあった。物の形を例える時によく使われるからだ。そして、自分の名前を書くことも日常生活でどうしても必要になる。そうした希望に応えるために椎葉先生や青山先生も手を尽くしてきたのだが、まだ打開策が見当たらないとのことだった。

# 二〇二六年度　高校国語（一回）

平仮名の書き取りはどんどん進んでいくけれど、渉君はまだまだ苦戦しているようだ。

僕は彼の視野の島を思い浮かべた。

水没してしまった島々の輪郭と、彼が反応できる輝度を考えていた。暗い海に浮かぶ島嶼（とうしょ）に風が吹いていた。島の輪郭は盲目の海に揺られて刻一刻と形を変えていく。

僕は検査室で彼の視野の形を見て、暗い思いを浮かべていた。そこから得られるデータは、どうしたって［D］できるようなものではなかった。今もそう思っている。けれども、だからといって、彼が不幸だという訳ではないのではないか、と思った。少なくとも、それを当事者ではない僕らが決めつけるのは間違っているような気がした。

僕は⑤大切なものを見落としているのではないかと、ここに来てようやく思えた。

渉君はあ行の書き取りが終わり、こちらを見た。今度は僕と目が合った。すると、あの清らかな笑顔を僕に向けた。

その瞬間、視野の島の暗澹（あんたん）とした空が晴れた。今日の天気のようだった。それは彼と初めて会った時から、感じていたことだった。

沈みかけた島は光を浴びて、緑や青に複雑に輝いている。凪（な）いだ海を心地よくくすぐる揺らめきは彼の笑顔のようだった。島嶼の内側にはゆたかな礁湖（しょうこ）さえ広がっていた。僕は暗い海ばかり見ようとしていた。検査室の中で作られた光で彼を観測していた。あの光では見えないものがあったのだ。だがいま、検査室の外にいる。ここには彼の世界の光があった。

島は見たこともない潤いと情景を映し出していた。

たぶん、これが答えなのだ。

僕は彼を見ていなかったのだ。

彼という人がそこにいて、彼の人生が視覚だけに捉われない輝いたものであることを見落としていた。今日、渉君は輝いていた。

僕はずっと、思い込みだけで彼に暗い顔を向けていたのではないだろうか。

僕は彼に微笑（ほほえ）み返した。すると、彼はもっと大きく笑った。

答えは、そのときやってきた。

「あの、サインペンありますか？　マジックでもいいんですが」

と、椎葉先生に訊ねた。彼女はすぐに用意してくれた。

僕は黒のサインペンを受け取り、彼が書き取りを行っているプリントの枠を濃く太くなぞった。五マス分書いて、名前の枠も引いたところで、

「これなら見えるよ！　これが枠だったんだね」

と彼は声をあげた。教室中に響く弾む声だった。見えないものが見えたのだ。プリントには白と黒のコントラストがはっきりとできた。

上がっていた。再度書き取りを始めた渉君は、今度は何なく枠内に字を収めていく、椎葉先生は嬉しそうに手を叩（たた）いていた。

「僕、できたよ！　ね！」と報告されると、目頭を熱くして彼の頭を撫（な）でていた。青山先生も、こちらにやってきた。

⑥彼は自分の名前を、平仮名で枠の中に書き始めていた。青山先生が驚いた後に、

「どうして、枠を濃くすれば大丈夫だと気づかれたのですか？」と訊ねた。

（砥上裕將『11ミリのふたつ星　視能訓練士野宮恭一』による）

問一　二重傍線部(a)「細々」・(b)「悶着」・(c)「融通」・(d)「生真面目」をひらがなに改めなさい。

問二　傍線部①「私と担任の青山先生が反対していた」理由を本文中の語句を用いて、三十字以内で説明しなさい。（句読点や記号も一字とする）

問三　空欄［A］～［D］に入る言葉として最も適切なものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。（記号は一度しか使えない）

ア　楽観視　　イ　現実的　　ウ　理想論　　エ　手加減　　オ　大丈夫

問四　傍線部②「渉君を囲む社会のことが分かったような気がした」とあるが、それはどのような社会か。解答欄にあうように本文中より二十字以内で抜き出しなさい。

問五　傍線部③「たぶん、彼が『仲間』だからだと思います」とあるが、椎葉先生はどういう意味で「仲間」と言っていると考えられるか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　運動神経のよい渉君になら何をしても大丈夫だという安心感を持っている。

イ　いつも笑顔を絶やさない渉君が実は様々に努力していることを子ども達がみな理解しているということ。

ウ　渉君の特性に自然と配慮しながら、自分たちのやりたいことを我慢しないでやり通しているということ。

エ　渉君の記憶力がよいことを皆が理解していて、少しでも難しくしようと声をかけあっているということ。

問六　傍線部④「彼女は、纏っていた静けさを崩して嬉しそうに、頷いた」とあるが、この時の心情として適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の指導の成果が今眼前に繰り広げられていることに満足感を持っている。

イ　子どもたちがほめられることを我がことのように感じ、誇らしく思っている。

ウ　素晴らしい子どもたちと一緒にいられることに感謝して、素直に喜んでいる。

エ　自分も初めて経験した喜びを他者に共感してもらえ若干冷静さを欠いている。

問七　傍線部⑤「大切なものを見落としているのではないか」とあるが、その「大切なもの」が書かれている一文を本文中より抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問八　傍線部⑥「どうして、枠を濃くすれば大丈夫だと気づかれたのですか？」とあるが、気づくきっかけとなったものは何だと考えられるか。本文中の語句を用いて十字以内で答えなさい。（句読点や記号も一字とする）

二〇二六年度　**高校国語（一回）**

三、次の古文を読んで、後の各問いに答えなさい。

唐の育王山[*1]の僧二人、布施[*2]を争ひてかまびすしかりければ、その寺の長老、大覚連和尚[*4]、この僧を恥しめていはく[*5]、「ある俗、他人の銀を百両預りて置きたりけるに、かの主死して後、その子に是を与ふ。①子、是を取らず。『親、既に与へずして、そこに寄せたり。それの物なるべし』といふ。かの俗、『我れはただ預かりたるばかりなり。譲り得たるにはあらず。親の物は子の物とこそなるべけれ』とて、また返しつ。互ひに争ひて取らず、果てにはくわん[a]の庁にて判断をこふに、『共に賢人なり』と。『いふ所当たれり。すべからく寺に寄せて、亡者の菩提[*6]を助けよ。』と判ず。この事、まのあたり見聞きし事なり。世俗塵労の俗士、なほ利養を貪らず。割愛出家の沙門の、世財をあらそはん[b]」とて、法に任せて寺を追ひ出してけり。③

（注）
＊1　育王山　＝　中国浙江省にある山。
＊2　布施　＝　仏や僧に施す金銭や品物。
＊3　かまびすしかりければ　＝　騒いでいたので
＊4　大覚連和尚　＝「大覚」は悟りを得た人の意。「連」は名前。
＊5　恥しめて　＝　戒めて
＊6　菩提　＝　死んだ後極楽浄土（一切の苦悩がなく平和安楽な世界）に生まれかわること。

問一　二重傍線部(a)「くわん」・(b)「あらそはん」を全て平仮名・現代仮名遣いに改めなさい。
問二　傍線部①「この僧を恥しめていはく」とあるが、この発言の意図として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。
ア　出家していない人でさえ、自分の利益だけを主張することはないのだと諭すため。
イ　親子の間であっても、借りたものは必ず返すのが礼儀であるということを諭すため。
ウ　賢人といわれた過去の高僧の逸話を示すことで、目標を高くもつべきだと諭すため。
エ　何事も裁判に訴えたとしても、何も生み出さないのだということを教え諭すため。
問三　傍線部②「子、是を取らず」とあるが、その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。
ア　僧は金に執着すべきではないという修行を積んでおりその修行を尊重すべきだと考えたから。
イ　親の物は子が受け継ぐべきであり、またその権利があるという法を尊重すべきだと考えたから。
ウ　死者のものは死者の供養のために用いるべきだという仏教の教えを尊重すべきだと考えたから。
エ　親が自分ではなく、この男に預けたものであるため、その意志を尊重すべきだと考えたから。
問四　傍線部③「追ひ出してけり」とあるが、誰が誰を追い出したのか、解答欄に合うように本文中より抜き出しなさい。
問五　本文の出典である『沙石集』は、鎌倉時代に成立したとされる説話集である。鎌倉時代に成立した作品を次より選び、記号で答えなさい。
ア　奥の細道　　イ　枕草子　　ウ　平家物語　　エ　源氏物語